

輸入粗飼料の情勢

全 酪 連
購 買 生 産 指 導 部
購 買 推 進 課

北米コンテナ船情勢

アメリカ西海岸の海運情勢は概ね正常化しており、安定した本船スケジュールで運航されています。特にロサンゼルス・ロングビーチ港では景気後退と大手小売り業者において、未だに合意しない北米西岸港湾労使交渉を敬遠し、コンテナ貨物の輸入を東海岸にシフトさせているため、両港の今年2月のコンテナ取扱数量は昨年2022年2月に比べ38%減少しています。

コンテナ海上運賃については、海運情勢の落ち着きと連動するようにピーク時より軟化しており、コロナウィルス感染拡大前の水準に近づいています。一方でカナダ産チモシーの出荷拠点となるカルガリーでは、中国を中心とするアジアからのコンテナ輸入量が減少しており、空コンテナ不足により船腹予約が難しく出荷遅延が増加しています。

ビートパルプ

【米国】

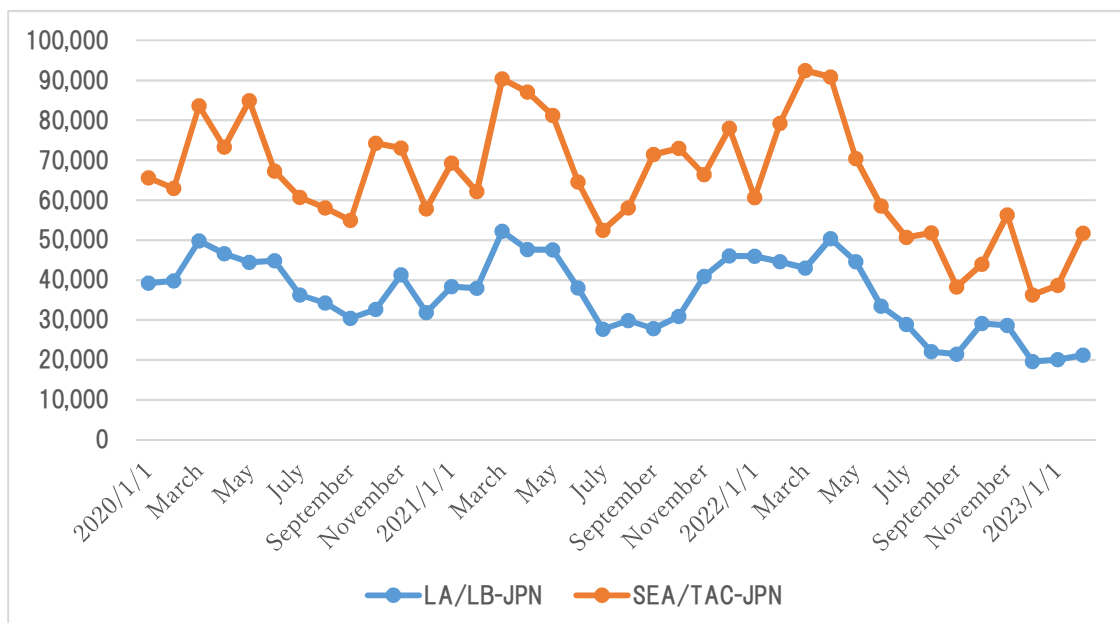
産地では4月に入り製糖作業を終了する工場が出始めています。22-23年産は産地における慢性的な労働人員の不足に加えて、ビートパルプの乾燥機の故障や、一部の工場で火災が発生したこともあり、生産面で苦勞する年となっています。また米国内の物流に関しても冬季の悪天候と、工場と船積み拠点を結ぶ鉄道会社のサービス低下により、出荷作業に大幅な遅延が発生しています。

新穀の23-24年産の生産については、産地で寒冷的な気候が続き、例年よりも雪融けが遅れています。この影響で播種作業の開始が遅れる可能性もあり生産スケジュールには今後も注視が必要です。

米国産牧草の日本への輸出量について

米国農務省（USDA）より4月5日に発表された輸出統計によると、23年2月にスーダングラス、クレイングラスを主とするロサンゼルス・ロングビーチ港から日本向けに輸出された牧草の輸出量は総計21,258トンとなっており、昨年2月の輸出量44,598トンに比べ47%と半減しています。主にアルファルファ、チモシー

が出荷されるシアトル・タコマ港においても、日本向けの輸出量は低調で、2月は前年同期比65%の輸出量となっており、産地相場が高騰する22年産の供給開始以降、北米産牧草の輸出量は低迷を続けています。



(2020年1月から2023年2月までのロサンゼルス・ロングビーチ港及びシアトル・タコマ港から日本に向けた牧草の輸出量推移 単位：トン 出典：USDA)

アルファルファ

ワシントン州

歴史的な高値により輸出向けアルファルファの荷動きは、低調なものとなっています。直近では日本、韓国向けだけでなく、これまで安定的に出荷が続いていた、中国向けも高騰する産地相場と為替の影響（中国元安）を背景に、出荷ペースが鈍化しています。産地輸出業者によると、これまで上級品中心であった中国向けの需要は、安価な中級品にシフトする動きも見られています。

またワシントン州近郊における酪農家向けの需要は、軟化傾向にある米国内乳価の影響を受け、高騰したアルファルファの給与量を減少させ、代替として相場が落ち着いているトウモロコシやストロー類の給与を増やし、飼料コスト低減に努める動きも見られています。

23年産の作付面積は前年比で同水準か微増する見込みとなっている反面、直近の国内外の需要減少に加え、周辺地域では旱魃も改善されていることから、中国向けの需要次第になりますが、23年産の産地相場は22年産よりも軟化することが期待されています。

カリフォルニア州

カリフォルニア州南部インペリアルバレーでは23年産2番刈の収穫が開始されています。23年産の1-2番刈は収穫期に散発的な降雨があったものの、成分値の高い上級品が多く発生しています。

産地相場については、22年産のピーク時と比べるとやや軟化傾向にありますが、内需及び輸出向けの買付が本格化していないため、今後も相場には注視が必要です。

インペリアルバレーにおける3月15日時点の作付面積は、153,070エーカー（前年同期134,031エーカー）と前年同期比114%となっています。

米国産チモシー

22年産は産地相場が高騰した影響で日本、韓国といった主要国の需要が著しく減少し、多くの輸出業者で22年産の在庫を新穀に繰り越すことが見込まれています。

他方で23年産の作付面積は主産地である、ワシントン州コロンビアベースンとキティタスバレーで前年並みになることが予想されています。23年産の作況が平年作となった場合、22年産の繰り越し在庫を含め供給が潤沢になることから、産地相場は22年産のピーク時よりも軟化することが期待されています。

スーダングラス

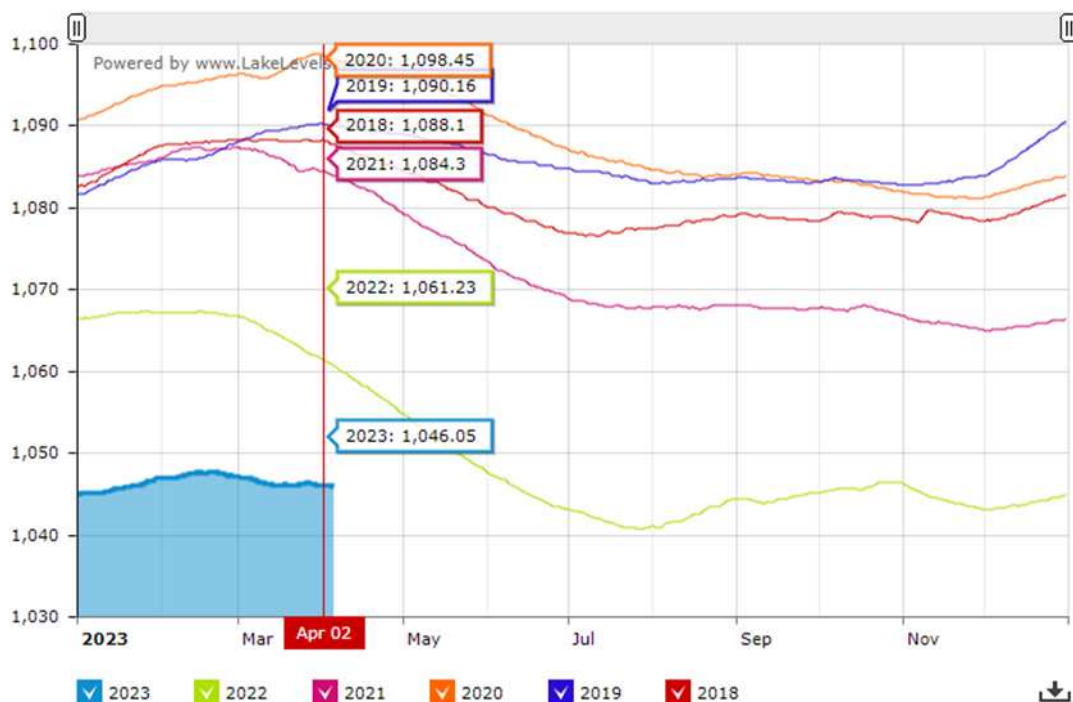
主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、23年産の播種作業が開始されています。これまで雨の日が多く、気温も冷涼なため生育は例年よりも若干遅いペースとなっています。

インペリアルバレー灌漑局の発表によると、4月1日時点の23年産の作付面積は10,678エーカー（前年同期13,987エーカー）となっており、前年同期比76%と、この時期としては過去10年で最低の作付面積となっています。

また産地の水源であるネバダ州ミード湖の水位は過去最低水準まで落ち込んでおり、2年前の2021年4月と比較すると、およそ40フィート=12メートル程度、水位が低くなっています。この影響で、インペリアルバレーの各生産者は引き続き節水しているため、23年産スーダンの生産量減少が懸念されますが、産地では22年産の繰り越し在庫が多く残っており、23年産の生産量が減少した場合でも日本からの需要を賄う十分な供給力がある見通しです。



23年産スーダングラスの圃場（4月上旬撮影）



（4月上旬における過去5年間のミード湖水位比較

単位：フィート 出典：Mead.USLakes.info)

クレーングラス（クレーンは全酪連の登録商標です）

主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーにおける4月1日時点の作付面積は22,033エーカー（前年同期19,323エーカー）となっており、先月に続き、前年同期比114%と増加しています。

昨年22年産は米国内の早魃と高騰したアルファルファ相場の影響により、クレーングラスに対する内需からの引き合いが強くなりましたが、直近では西海岸における早魃状況は改善しており、昨年よりも調達できる飼料の選択肢が多いため、ピーク時に比べ内需からの引き合いは弱くなっています。引き続き内需の引き合いには注視が

必要ですが、輸入需要を賄うには十分な生産が見込まれており、23年産は産地相場の軟化が期待されています。

23年の生産については産地では水入れが開始されています。産地では例年よりも冷涼な気候が続いているため、1番刈の収穫は4月下旬から本格化する見込みです。



23年産クレイングラスの水入れ後の圃場（4月上旬撮影）

バミューダ

主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーにおける4月1日時点の作付面積は64,722エーカー（前年同期61,503エーカー）と前年同期比105%の作付面積となっています。

天候次第になりますが、23年産は4月中下旬から収穫が開始される見込みとなっており、種子相場が堅調な為、序盤は例年通り多くの生産者が種子向けの収穫を行う見込みです。

ストロー類（フェスキュー・ライグラス）

22年産のライグラスストローとフェスキューストローは、需要国である日本、韓国で自給飼料が多く収穫できたため、荷動きが鈍化しています。産地では余剰在庫が発生しており、産地相場は軟化傾向にあります。

カナダ産チモシー

主産地であるアルバータ州では、冬期に大雪や最低気温が -20°C ～ -30°C となった日もあり、工場への原料草搬入が滞り、工場での生産が大幅に遅延しましたが、直近は天候も落ち着いており、生産は安定化しています。

23年産については主産地のひとつである、クレモナ地区で2月まで深刻な旱魃となっていました。生育期である今後5～7月の降水量が例年並みの予報となっており、状況が改善するか、今後の天候に注視が必要です。

豪州産オーツハイ

豪州では23年産の播種前に輸出業者と生産農家の間でオーツハイ買付けにおける仮契約の交渉が進められています。直近、小麦などの穀物相場が軟化していることや、国内外からのオーツハイの引き合いが増加していることから、西豪州では23年産オーツハイの作付面積は前年比10%程度増加することが見込まれています。南豪州、東豪州については、23年産は前年と同程度の作付面積となることが予想されています。

一方で、この先の生育期に例年よりも乾燥した天候となることが全豪的に報じられており、早魃は単収が減り生産量に影響を及ぼすため、今後の天候には注視が必要です。

以上